

第IV節 自己自身との関わりにおける困難

説教者が問題

- 日曜日の説教という「制度」と同じく問題になるのは、「日曜日に語る人」。
- 自分自身が自分にとって切実な困惑の種！
- 最高度に疑わしいのは、神について語るということを敢えてする人間。
- 単に「いかにそれをなすか」ではなく、寧ろ「いかにそれをなしうるか」が問題。更に問題は、「誰がそれをなしうるか」

説教者の自己同一性の危機

- 説教者は、自分自身の人格にはぴったりしない職務意識を深めるだけ。
- 自分のやっている事の意味を自分ではもはや見抜けなくなっているのに、それをやっている。
- 言葉と実存の間に不一致がある事を、言葉が暴露。
- 説教者が語っている事に言葉そのものが矛盾していることも起こる（第23章説教者の為の罪表第II節罪表詳論）
- この同一性の喪失は、結局、単一性の喪失として自己を明らかにする。

司祭の自己同一性の問題を扱った著作

- クルトマルティン・マギエラの小説『リドルとアイヒホルンと他の人々』（1969年、邦訳なし）
- 司祭職の持つ問題
フェルディナント・クロスターマン『明日に備える司祭』（1970年、邦訳なし）
- 福音主義の牧師職に関する同様の労作はまだない。

「説教者が自己同一性を持たないということは、説教者の、神・世界・教会に対する関係が乱されている、と言える。何よりも強調したいのは、説教者と教会との関係が壊れてしまっていること（一般的に

は「全体の教会」、特殊に言えば「個々の教会」)。説教者が、ひとつの教会に属する兄弟姉妹との交わりを持つことなしに生きている時には、説教者自身に何かが欠如している（つまり、説教者は牧会者でなければ自己同一性が欠如してしまう、と言う事か。）教会が説教者の一種の「第二の自己」になるようなことがない所では、説教者の自己そのものに、…、欠如するものがある。教会との結びつきが欠けているということが自分自身の行為との関わりにおける不確かさをつくり出している。…単純な心になりたいと思う者は、ただ多くの兄弟姉妹と共に生きることによる他はないだろう。（情熱としての説教への教会員の参与を〔＜第一章参照＞（p32 最終行から p35 後ろから 4 行目）〕ただ単に説教に対する会衆の期待としてのみ描写することだけではゆるされなかったのかも！）

「説教」という職人芸¹を身に着けていない⇒

説教者が自己同一性を持たない、とも言える。

説教者が説教することを学んだことはないし、今も学んではいない。学ぶべき（という認識があった）なら、説教実習を毎学期毎にしなければならなかった筈²。このような学習過程では、学生は自分が語るべきことを学びはしない。学生が自分の使命を果たす言葉を持つほどに成長していないのが通例。「自分の持つ世界像を言葉をもって言い表しうる程に成長していない作家のことを、ドイツでは、“見るだけの人間 Seher”と呼ぶ」（ゴットフリードベン³）。

¹ “「説教という手仕事」と訳しているが、「説教という職人芸」と訳す方が相応しい” 加藤先生 2022/4/12 での発言による

² 文末脚注（19）p617。ドイツの大学神学部、もしくは神学部にあける説教の学習は、その学校の伝統や教授の考え方によって異なる。もとより、実際に説教を行わせ、その批判をするということをしていないわけではない。しかし、その説教の行為に、著者が言うように集中していないことは明らかであるし、説教の演習は、しばしば聖書学的積義に傾きすぎて、殆ど聖書学の演習と異なることがない場合も起こる。

³ ゴットフリード・ベン（Gottfried Benn, 1886年5月2日 - 1956年7月7日）は、ドイツ・表現主義文学の代表的な詩人。ブランデンブルク州ヴェストプリーグニッツ郡（ドイツ語版）マンスフェルト（現プートリッツの一部）の牧師の息子として生まれる。母はフランス系スイス人。当初は父の意向に随って神学・文献学をマールブルク大学、フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（現ベルリン大学）で学んだが、その後志望を変更し、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム大学軍医養成大学で医学、生物学を学んだ。1912年に卒業して軍医となり、同年に最初の詩集『モルグ』を発表。医学・生物学的知識を活用したグロテスクな表現でセンセーションを起こした。一時ナチスに傾倒するもその後は反ナチスの態度を取り、1938年に文学活動を禁止される。第二次世界大戦後はベルリンで開業医を営みしばらく沈黙していたが、1948年『静学詩篇』を刊行して復活し一躍世界的名声を獲得。現実から超越した形式・美学を追求し、若い世代にも影響を与えた。1956年、70歳の誕生日の2か月後にベルリンで死去。

学生が言葉のうえで説教不能となっている症状の三方向での分析

第一の方向：

釈義は説教者に言葉を与えて、その言葉を把握しうるようにしてあげることは出来ない。（説教者の）言葉を拡大する事こそ、釈義には不可能。

ヴィリー・マルクセン「釈義はたいていの場合、さまざまな注解書から、入念な仕方で集め、まとめられる。この場合にしばしば、混成化成の方法が用いられることは勿論のことである。ひとつのよい考えがこちらから、あちらからと受け入れられる。諸注解書の固有性、それぞれの概念がすっかりその特色を失い平板化されてしまう。しばしば説教の中で、注解書の考えが、時には釈義の文章そのものまでが現れて来ることがある。… 釈義と説教の間には、橋がかかっているとは思えない。たいていの場合、そうした橋は全く存在しない。この事実は、私には、今日の状況を示す徴候のように思われる。私は不思議に思うのだが、聖書の釈義がのちに有効に用いられるということもないのに、釈義のために注がれているこの労苦は、いったい何だというのであろうか」（『聖書釈義と宣教』 今日的神学的実存双書第59号、1957年）。「（入念に各注解書から寄せ集められた）ここにある釈義—それは全く釈義などというようなものではない。それ故に架橋作業の基礎を提供することは不可能。説教の危機は、極めて深く釈義の危機なのである」

第二の方向：学生は、聖書テキストを、妥当な組織的連関の中で見ることができない。

- テキストがどのような働きをしてきたかという歴史は視野に入って来ない。教会がこのテキストについて、これまで既にどのように考えて来たか、について何も知らない。
- 一種の教義学的無知の為に、**テキストをして教会の伝統と対話させ、そうした対話に於いて、テキストの持つ今日における新しさを認識する**ということができなくなってい

る（第二十一章黙想について第V節 説教のための黙想について）。

- テキストが歴史を造って来た。場合によってはある教義学的論点形成には、テキストがその原因となってさえいた。釈義も又常に、教義学的伝統によって規定されている。釈義が伝統を圧迫している場合にはそう。
- 教会の中においてテキストが作用を及ぼしてきた歴史と共に、またこれに逆らいつつ、テキストに聞き入ることをしないなら、私が説教者として、テキストを聞くことは決してあり得ない。
- 釈義が学生にとって、言葉を与える助けになり得ないのが通例なのは、学生がテキストの解釈に際して教義学の助けを用いることを知らないから。

第三の方向：学生は、語るという事としての説教が要求する作業がどれほどの広がりを持つものであるか、見当もつかなかった。語る事そのことは注目されていなかった。

- 説教研究がされてこなかった。
- 語る人間に属する諸問題を全く無視していた。
- 説教者自身が釈義と組織神学とを使いすぎることによって、今日の状況が惹き起こしているような逆作用を生んだ。
- 現れてきている諸問題に対する鈍感さは、勇気と幻想力の欠如と同じく、ひどいもの。

道を開き得る四つのこと

第一：

実践神学者が神学緒科解題⁴について講義すること

⁴ [英語]Theological Encyclopedia. 神学諸科,あるいは、神学諸科解題と訳されている、神学のエンサイクロペディアが神学における一部門として設けられるようになったのは、18世紀初頭のことであり、その歴史はそれほど古いものではない。神学研究の細分化に伴

い、神学の部門が急激に数を増したため、神学教育の観点から、相互の関連性を明らかにする必要に迫られてきた結果設けられるに至った部門である。従って、現在、神学教育のカリキュラムとして考察されるに至ったものと重なり合う性格を持っているが、何より、神学を、有機的関連性を持つ体系としてとらえようとするところに特徴を持っている。エンサイクロペディアを神学の部門として最初に提示したのは、シュライアマハー（シュライエルマッハー）であると言われる。1804年、彼は、「エンサイクロペディアと方法論」（Enzyklopaëdie und Methodologie）という題の講義を行い、後に、これを整えた形で、『神学通論』（Kurze Darstellung des Theologischen Studiums）を出版した。＜復＞シュライアマハーによれば、神学は、大きく、哲学的神学、歴史神学、実践神学の3部に分けられる。第1部には、弁証学と論争学、第2部には、釈義神学、教会史、教理神学、教会論、第3部には、教会奉仕、教化的活動、指導的活動、教会政治が含まれる。この分類から明らかなように、神学を宗教の歴史的局面としてとらえ、その本質を「絶対依存感情」に求める彼の神学理解が示されている。このように、神学諸科解題は、その神学者の神学理解、神学体系が最も端的に表現される神学部門であると言える。シュライアマハーのエンサイクロペディアが、後に『神学通論』として出版されたように、現代のエンサイクロペディアも、例えば、エバーリングによって『神学研究』（Studium der Theologie, 1977）のタイトルで出版されている。このことから理解されるように、諸科解題は、神学序説（プロレゴメナ）の問題と重複する部分が多い。それぞれの神学の特有性が最も顕著にエンサイクロペディアの取扱い方に見られたことは、ローマ・カトリック神学の諸科の取り上げ方によく表れている。…略…プロテスタント神学の場合、シュライアマハーの後に、ルードルフ・ハーゲンバハ（Rudolf Hagenbach）が示した『神学諸科解題』（Enzyklopaëdie und Methodologie der Theologischen Wissenschaften, 1833）が、その後、ドイツの大学の神学部で用いられ、英国、米国にも紹介され現在に至っている。それは、神学を、釈義部門、歴史部門、組織部

第二：

学習の期間全体を通じて、説教について組織神学的に研究すること。

第三：

門、実践部門の4部に分けるものである。釈義部門は、聖書神学部門とも言われ、聖書語学、旧約諸論、旧約釈義、旧約神学、新約諸論、新約釈義、新約神学を含む。歴史（神学）部門は、教会史、教理史を、組織（神学）部門は、教理学、弁証学、倫理学を、実践（神学）部門は、説教学、礼拝学、牧会学、教会政治学、信条学、礼典学を含むものとされるのが一般的である。…略…倫理学を教理学の内部で取り上げる傾向も今世紀になって強い。倫理的価値観の多様化する現代において、倫理学は特に多様な対応を迫られている分野であり、諸科における位置いかんにかかわらず、多面的な対応を迫られていることは言うまでもない。…略…教会のミニストリーの多様化に対応した細分化の必要に迫られている。この点、米国の諸神学校のカリキュラムは充実している。実践神学は、方法論的考察、あるいは、テクニクの紹介に終わってしまう場合も多い。従って、特に、神学諸科における妥当な位置付けが求められている。

…（略）…神学が、単に、体系として統一性と整合性を保つために神学諸科の問題が重要であるというだけでなく、神学が教会の形成を活性化及び宣教活動の推進のために役立てられるものとされるために、神学エンサイクロペディアの問題の重要性が認識される必要がある。わが国で神学諸科解題を最も詳細に取り上げたのは熊野義孝であった。1955年、『基督教講座』の中で、78ページにわたって書いている。彼は、神学諸科解題について、「序論的であると同時に結語的であり、入門を兼ねた卒業の論説とも見られる」と表現している。神学エンサイクロペディアは正しくその通り、入門であると同時に、神学する者、特に、神学教育に当る者が、生涯、内容を整え、時代の要求に則して課題を指摘し続けなければならない学問なのである。わが国でのこの部門の熟成が望まれる。…略…

（出典：『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991）

聖書釈義の予備演習が説教の地平を明瞭にすること・教会史の演習がもっと説教をとりあげること。教会史の演習がもっと、説教をとり上げること。学習状況の把握も、第一に説教を手掛かりにすること。

第四：

古典語学習は、一種独特の厳格さをもって必要性を強調されるが、その古典語を使ってすることに関しては、厳格である事に対応して甘い。

- 説教が言葉の教会の中で、二次的事柄としてしか認められていないのが通例。
- 学習が、本来なすべき「言葉の助けを与えること」を為しえていない。
- 牧師職の諸構造に対して特別に注目されねばならない。
- 将来の職務の為に目的設定を整えることも、神学の学習には不可欠。
- 説教学的に無為に過ごしながらか安逸に過ごす癖は、大学での勉強を終えても続いている。

⇒

- 説教の勉強をする牧師は少ない。
 - 「日曜日ごとに説教壇から叫ばれているのは、事実上は、いかに準備に欠けているところ多いかがよく分かる説教ばかり」(マルティン・ズヌス「説教の聴き手としての説教者」『牧会神学雑誌』第56号、1967年)
 - レオ・ヴァルターマンは、「残念ながら、少ないとは言えない説教」について次のように語る。「それらの説教においては、説教者が、自分を説教にふさわしいものとしようと努力しているのを認め得るが、その努力があまりにも遅くなされ、その遅すぎた努力が説教を救いもせず、改善してもいないことを認めざるを得ない。数日にわたり、また数時間にわたって配分された努力をすれば、説教者にもっと確信を与え、ゆったりさせ、また我々聴衆は、もっと喜んで説教を聴くことができ、説教に心打た

れるようになるであろう」(『説教者へあてた手紙』—『み言葉への奉仕』 1967年、第二号)

説教の準備不足

- その原因を、説教作業そのものに於ける熱意不足だけではなく、しばしば、**牧師の説教学的教育の継続が根本的に欠けている点に求められるべき。**
- 自分の説教をとにかく準備することだけでは不十分。**一生の間説教する者は、一生を通じて、理論的に説教と対決していくことを続けねばならない。**
- この学問的世界においては、自分自身の行為について釈明を与えることができるような説教でないと、時代遅れになってしまう。
- 黙想集や説教参考書の持つ問題性。

それらは、実際に、中途半端なものを語ってしまうように、説教者を誘惑する。説教者は、いつでも要求されている説教の勉強のための努力を軽んじるようになる。そのために、わたしは、熱心な説教者においても、少なくとも、二十四時間説教するのが早すぎたのではないかと思われる説教を聴かされることを繰り返す。(第11章・説教と引用 第Ⅲ節 付論・他人の説教を用いることについて)

説教の技術的能力の欠陥

- 技術能力の欠陥が、「広範囲には反響を呼び起こさない」という結果を伴う。
- マスメディアが説教の状況を変えて、従来の方法が続けることを許さないほど。
- **説教の危機があるなら、①説教をやめてしまう、か、②新しくやり直す、かの可能性が含まれる。**
- いずれにせよ、相変わらず因襲の中に生き続けることは問題にならない。

説教者という自己同一性

- 「牧師が、もう一度、改めて、説教者になり、み言葉に奉仕するものとして自己を理解するようになる時、そのみ言葉を捉えることによって、自分の自己分裂を克服し、「単一」になるということも可能。
- 聞くということの中で、み言葉は、説教者を支配する力を持ち、そうでなければ、説教者の持つ分裂を克服することになるであろう。
- しかしながら、み言葉は真空においてではなく、教会的また社会的構造の中で聞きとられるものであるがゆえに、作業療法としておすすめしたいのは、説教学研究やよりよき準備と共に、協力ということである。構造というものは、共同作業によってのみ変革されるからである。
- しかしここでは、ただ作業療法だけでも不十分。牧師が一般的に言って、疲れ果てていることからすれば、そうした協力の中で問い始めなければならないことは、説教者が何をしなければならぬか、ではなく、寧ろ、何をすることがないか、ということである。説教者となろうとする者は、安息日から始めなければならない。即ち、休息、神が聖としておられる時間から始めねばならない。
- 我々は自分で自分を救済することができないゆえに、説教は、一種の無為から始める。和解の務めは、祭りから生じる。おそらくは、説教者がその自己同一性を失ったのは、日曜日と共にこれを失ったのだとも言い得る。説教者自身が、日曜日の在り方を生きる事によって自己同一性を再び見出すであろう。」